

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

古典語の複合辞について：ベカラムの場合

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード: 複合辞, 古典語, ベカラム, 用法, 複合辞性 作成者: 三宅, 清 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001707 |

古典語の複合辞について—ベカラムの場合—

三宅 清

キーワード：複合辞 古典語 ベカラム 用法 複合辞性

1 はじめに

複合辞の研究は、纏ったものとしては、例えば、田野村（2002）藤田・山崎（2006）藤田（2019）松木（2023）などが挙げられ、日本語教育の分野ではグループ・ジャマシイ（1998）（2023）田中（2010）などが挙げられる¹⁾。いずれも対象は現代語である。そのことについて、藤田・山崎（2006：204）に次のような指摘がある。

複合辞研究も、現在通時的・共時的両方向からの研究が行われているが、「複合辞」という捉え方自体が元々共時的な観点から生まれたものであるため、共時的研究の方が盛んであることは確かである。

古典語における複合辞の研究は現代語に比して少ない²⁾。本稿で取り上げるような、助動詞同士の結合については特に少ない³⁾。現代語における複合助動詞については、モダリティ形式に関する研究の多くの蓄積がある。藤田・山崎（2006：11）には次のような指摘がある。

複合助動詞と考えられるような形式が多くはモダリティ的な意味を担うと見られるものであったため、1980年代後半以降、文法研究の流行がモダリティ問題に移るにつれ、個々の意味・用法の記述はそれなりに進んでいったといえる。

松木（2023：93）にも

一方、「複合助動詞」については、そのような名称を用いた総括的な研究はなく、モダリティと関連づけた文末表現形式として、個々の記述が少

しずつ見られるようになってきた段階である。
とある。

また、複合辞研究といっても、複合助詞と複合助動詞とを比べると、現代語、古典語において、複合助詞の研究の方が多くことも指摘できよう。小田(2018)も、古典語の複合辞として扱っているのは、「と+動詞/形容詞」型複合辞、「に+動詞」型複合辞、「は+動詞」「も+動詞」型複合辞、「より+動詞」型複合辞、「を+動詞」型複合辞と、複合助詞的なものである。

また、複合辞の構成としては、田野村(2002)のように、「辞的な要素だけを含む辞」と「詞的な要素を含む辞」に分けられる。つまり、「詞+辞」「辞+辞」ということである。この両者の場合、「詞+辞」に関する研究の方が多いのではないか。それは、「詞+辞」の方が、その結合において、助詞的表現にしても助動詞的表現にしても、「詞」の意味の変化が「辞」の意味の変化より、その過程が辿りやすいからではないか。松木氏の複合辞認定の基準は後に挙げるが、その基準の前提となっているのは、松木(1990:37)に挙げられている次の3点である。

- (i) 構成要素の緊密度の度合い
- (ii) 形式名詞・形式用言の形式化の度合い
- (iii) 形式用言の文法範疇喪失の度合い

形式名詞、形式用言というような「詞」を中心とした尺度である。次のような記述もある(国立国語研究所2019:101)。

複合辞はその多くが自立語である名詞、用言を中心に構成され、それが機能語に変化した、いわゆる文法化現象とも捉えることができる。

そして、何より古典語における複合辞研究が現代語のそれに比べて盛んではないのは、内省が利かないということに原因がある⁴⁾。

例えば小田(2018:3)では、

複合辞の把握について常につきまとうのは、その認定基準であって、特に内省の利かない古代語の場合は、客観的な認定は非常に困難である。という指摘がある。

ところで、複合辞研究の嚆矢といえる永野(1953)では、

1 単なる構成要素のプラス以上の意味を持っていること。

2 類語（意味の近似した他の助詞や複合助詞）の中にあつて、独特の意味やニュアンスを分担していること。

3 構成要素の結合が固着していること。

を複合辞の認定基準としている。永野（1953）に検討を加えたものが松木（1990）であり、それを集約したものが松木（2023：123-124）に挙げられている。

(a) 辞的機能を果たしている。

(b) 「詞」（実質的意味）から「辞」（形式的・関係構成的機能）へと変化している。

(c) 構成要素の合計以上の独自の意味が生じている。

この中でよく問題にされるのが、(c) の「構成要素の合計以上の独自の意味が生じている。」⁵⁾である。

筆者は、これまで古典語の助動詞同士の結合—ベカメリ、ケラシ、ツラウ—について、その複合辞性について触れてきた⁶⁾。いわゆる推量系の助動詞同士の結合が多い。それらが複合辞か否かの判断の基準は、上掲の松木（1990）の認定基準に強いて当てはめようとするれば、(c) に当たる。主にその認定基準によって複合辞か連語かを判断した。しかしながら、ベカメリ、ケラシ、ツラウはいずれも「辞」+「辞」であり、現代語の「詞」+「辞」を主な対象としていると思われる松木氏の認定基準（その基には永野氏の認定基準がある）には当てはまらないのではないか。

そこで、意味の面だけでは曖昧さが残るため、本稿では、複合辞認定の範囲を広げ、構文の特徴も含んだ用法の観点から複合辞をみていく。取り上げるのは「ベカラム」である。

本稿では、先学の複合辞研究を踏まえて、推量系の助動詞の結合であるベカラムについて、複合辞性の観点から考察を加える。

ベカラムとは、次のようなベシ+ムを指す。

1 かう深き思ひは、その大方の世のおぼえも、官位も思ほえず、ただ異なる事なかりしみづからの有様のみこそ、堪へがたく恋しかりけれ。何ば

かりの事にてか、思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめ給ふ。(柏木1260・14)

2 「いかにしてか、いたづらになり給ふまじきわざはすべからむ」と、忍びてさるべきどち宣ひて、大宮をのみぞ恨み聞え給ふ。(少女685・11)

3 尼君、思ひやり深き人にて、「あぢきなし。見奉らざらむ事は、いと胸痛かりぬべけれど、終にこの御為によかるべからむ事をこそ思はめ。
(薄雲604・10)

同じような推量（推定）の助動詞が結合したベカメリ、ケラシは辞書類でも立項されていることが多いが、ベカラムは立項されていいたりいなかったりである。⁷⁾また、ベカラムを正面から取り上げた論考も、管見の限りでは無い。そこで、本稿では、ベカラムの用法を記述し、ベカラムの複合辞性について考えていく。

資料は源氏物語を用いる。⁸⁾源氏にはベカラムは40例（終止用法24例、連体・準体用法16例）みられる。40例のうち、1例が草子地で、あとはすべて会話文か心内文である。

終止用法といっても、上掲の1、2のような、係り結びの結びとなっている例ばかりである。論の進め方としては、終止用法、連体・準体用法の順にみていき、最後にその複合辞性について考える。

2 終止用法

終止用法で特徴的なのは、疑問詞「いかが（は）」「いかでか（は）」などの結びになっている例が多いことである。

4 又、手を放ちて後めたからむこと、つれづれも慰む方なくては、いかが明し暮すべからむ、何につけてかたまさかの御立ち寄りもあらむ、など様々に思ひ乱るるに、身の憂き事限りなし。(薄雲604・7)

(明石の君の心中)

<この所在なさも晴らす方法がなくは、どのように暮らしていけよう
か>

5 人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形なるを、などかいあ

らむと思しながら、かの大臣のかくし給へる事を、いかがは聞え返すべからむ、さるやうある事にこそ、と心得給へる筋さへあれば、任せ聞え給へり。(藤袴928・1)

(鬚黒大将の心中)

<人柄も大層にご立派で、朝廷の御後見となると思われている候補者なので、(内大臣は)婿とするのになんの異議があらうとお思いになるものの、あの大臣(源氏)がこのように取り仕切っていらっしゃることに、どうして言い返せよう。>

6をかしやかに気色ばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞え返さめ、年頃も、公様の折々の御とぶらひなどは、聞えならばし給ひて、いとまめやかなれば、いかがは聞えも紛らかすべからむと、もて煩ふべし。(少女665・14)

(朝顔の姫君の侍女の心中)

<(宣旨は)「思わせぶりの、人の気を誘うようなお手紙などが添えてあるのですたら、なんとか申し上げてお返しいたしまししょうが、長年、表向きのお見舞いなどはいつも申し上げていらっしゃる、大層まじめな(お手紙)ですので、どう取り繕って申し上げられましよう」と、困っているにちがいない。>

7一日二日も見え給はず、かれがれにおはせしをだに、飽かず胸痛く思ひ侍りしを、朝夕の光失ひては、いかに長らふべからむ」と、御声もえ忍びあへ給はず泣い給ふに、御前なる大人大人しき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕の気色なり。(葵317・10)

(左大臣から年輩の女房たちへの発話)

<途絶えがちでいらっしゃるのさえ不満で胸の痛む思いをしておりましたのに、朝夕の光(源氏)をなくしてはどうして生きながらえよう。>

いずれも例えば『新編日本古典文学全集』(小学館)を見ると、いわゆる反語に訳している。4「どうして日々を過してゆけようか」5「どうして異を申し立てられよう」6「どう取り繕ってお断り申せましよう」7「どうして生き長らえましよう」。これらの場合の反語は、話し手・思っている人が、

疑問詞とベカラムに挟まれた行為が不可能であるという結論を持ちながら、それを疑問として提示するものである。その不可能（可能）の意味はベカラムのベシが担い、疑問詞とベカラムのムとの呼応で疑問推量を表している。すなわち、意味としては、ベシ（可能）＋ム（推量）で、二語の合計以上の意味は表されていない（つまり松木氏の認定基準に照らし合わせると、複合辞とはいえない）。

しかしながら、その範囲を構文を含む用法まで広げると、ある特徴がみられる。それは、ベカラムに上接する行為の主体は話し手、思っている人自身という例がほとんどということである。

疑問詞—自分自身の行為—ベカラム

のように、終止用法ベカラムの8割近く図式化できる。このような用法の固定化は、ベシ、ム単独ではみられないベカラム独自の構文といえよう。

また、ベカラムの用法のもう一つの特徴として、上述のように、反語に解釈されやすいということが指摘できる。反語の場合、ベカラムは事実を対象としていない。4でいえば、ベカラムに上接する「明し暮す」という行為は、思っている明石の君が思っている時点ではまだ実現されていない、想像である。事実ではない。それを反語として打ち消す場合も、やはり実現されていない、想像である。5は「聞え返す」6は「聞え紛らかす」7は「長らふ」が話している、思っている時点では、今後、起こるかもしれないし、起こらないかもしれない、実現されていない行為である。事実とはいえない。それを打ち消す反語の場合も同様である。

ベシ、ム単独の場合にも少数ながら「疑問詞—自分自身の行為—ベシ、ム」という形式がみられる。

8身のことにては、げにいと耐え難かるべきわざなりけり。あやしや、な
どかうしも思ふべき心入られぞ、と思ひ返し給へど、えしも叶わず。(夕霧1351・4)

8は（夕霧が）なぜこうまで（落葉の宮）のことを苦しく思い焦がれなけれ

ばならないのかと思ひ返している。夕霧が自分自身の心中を述べている場面で、「かう」という指示詞からも、今自分自身に起こっている事実であることがわかる。

9 などかく程もなくしなしつる身ならむと、かき昏し思ひ乱れて（柏木1228・7）

9は柏木の心中で、どうしてこうも生きる瀬もなく世間を狭めてしまったのかと思っている。ムに上接する「程もなくしなしつる身なり」は、柏木自身の行為で、「かく」で、それが目の前で行われていること、すなわち事実であることがわかる。事実を対象とする場合、推量の焦点は、事実である部分を飛び越えて、不確かな疑問詞に向かう⁹⁾。一方ベカラムは、疑問詞はもちろん、上述のようにベカラムに上接する自分自身の行為自体が事実ではない、全体が不確かなため、推量の焦点が疑問詞には向くということはない。その点は、疑問詞の違いにも現れている。ベカラムの場合、疑問詞が原因・理由を表さない。疑問詞も「など(か)」「などで(か)」などではなく、「いかが(は)」「いかでか(は)」などである。その場合、「いかが(は)」「いかでか(は)」は推量の焦点化されることはない。

ベカラム24例中5例は、疑問形式であるが、自分自身の行為とは限らない。

10狭き垣根の内なりとも、その折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑ渡し、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひ給ふるを、いづ方にか御心寄せ侍るべからむと聞え給ふに（薄雲628・9）

10は源氏の発話である。源氏が女御に春と秋とどちらを鼠舩にしますかと聞いている。つまり、ベカラムに上接する行為は、源氏自身の行為ではなく、女御の行為である。

11よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとしくは何かは。さ思はれば、今日にても」と宣ひ捨てて渡り給ひぬ。（常夏846・4）

11は出仕始めの日は、陰陽師に吉日を選ばせて決めるということだろう、という場面で、ベカラムに上接する「いふ」は漠然とした、世間一般でいわれているということである。

12かの見つる前々の、桜山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ。

(野分878・12)

12は夕霧の心中。あの垣間見た紫の上と玉鬢を桜と山吹に喩えるなら、明石の姫君は藤の花とでもいうところだろうか、という心中。ベカラムに上接する「いふ」は、夕霧の行為ともいえるが、主体が漠然とした行為ともいえる。

13いかならむ折にか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、終に忍び過し給ひて、東宮などにも心を寄せ聞え給ふ。(若菜上1028・12)

13は二重下線部のように、「世間で疑われている」という事態である。

3 連体(準体)用法

前述のように、16例みられる。その中で、次のような命令や願望を表す句に続く場合が、半数以上の9例みられる¹⁰⁾。

14齋宮におはしましし頃ほひの、御罪軽むべからむ功德の事を必ずせさせ給へ。いと悔しき事になむありける」など言ひ続くれど(若菜下1187・1)

14は御息所から他者である物の怪への発話。「自分(御息所)の罪が軽くなる供養を必ずして下さい。」と言っているという場面。

15近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに、語りも合はせばやと、うちも笑まれ、涙もさしくみ(帚木43・3)

15は左馬頭から他者である架空の妻への願望であり、「近くで世話をする人で(様々なことを)聞いて理解する(人)と語り合ってみたい」と願っているという場面。

14のベカラムが係っていく「功德の事を必ずせさせ給へ」は、命令であることにより、上接する行為「功德の事をす」は話している時点ではまだ行われていないこと(未実現)を表す。また、15も、「ばや」という願望を表すことにより、上接する行為「語り合はす」が思っている時点ではまだ行われていないこと(未実現)を表す。つまり事実ではない。類例を挙げる。

16姫宮の、いとうつくしげにて、若く、何心なき御有様なるを見奉り給ふにも、「見はやし奉り、かつは又、片生ならむ事をば、見隠し教へ聞え

つべからむ人の、後やすからむに預け聞えばや」など聞え給ふ。(若菜上1032・3)

17いかでかの辺の事伝へつべからむ人もがな」と宣はせしかば(東屋1797・11)

18世とともに恋ひ渡る人の形見にも、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがな、つれづれも心細きままに思ひ嘆きけるを、かくおぼえぬ人のかたちけはひもまさり様なるを得たれば(手習2004・3)

19ここにてだにうち乱れ、この頃世にあらむ事の、少し珍しくねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせ給へ。(常夏829・11)

20「まことにその人か。よからぬ狐などいふなる物のたふれたるが、亡き人の面伏なる事言ひ出づるもあなるを、たしかなる名乗りせよ。又人の知らざらむ事の、心に著く思ひ出でられぬべからむを言へ。さてなむ、いささかにても信ずべき」(若菜下1185・12)

次のようにベカラムに上接する行為が漠然とした様子(状況)を表す例もみられる(3例)。あるいは「あるべからむやうに」で慣用的な表現かもしれないが、これらも、少なくともベカラムに上接する行為が話し手・思っている人自身ではないということができる。

21あるべからむやうに宣はせよかし。何事も疎からず承らむのみこそ、本意のかなふにては待らめ」など、まめだちたる事どもを聞え給ふ。(宿木1718・14)

22「この寝殿は変へて造るべきやうあり。造り出でむ程は、かの廊にものし給へ。京の宮に取り渡さるべき物などあらば、庄の人召して、あるべからむやうにものし給へ」など、まめやかなる事どもを語らひ給ふ。(宿木1760・12)

ベカラムが命令や願望と結びつくのは偶然ではない。命令や願望で表される行為は、話している、思っている時点ではまだ行われていない、未実現の行為である。終止用法では自分自身の行為が多かったが、連体(準体)用法では、ベカラムに上接するのは、他者の行為が圧倒的に多い。命令や願望は、話し手・思っている人がベカラムに上接する行為の実現を他者に強く期待す

るものである。ベカラムに上接する行為が実現するように命令したり、願望したりするのだから、話したり、思っている時点では、ベカラムに上接する行為は未実現である。例えば19ではベカラムに上接する「(ねぶたさ) 醒む」という行為が実現するように源氏が大殿の君達に対して命令している。源氏が話している時点では、ベカラムに上接する「(ねぶたさ) 醒む」は未実現である。したがって、同じ未実現の命令「語りて聞かせ給へ」という行為と結びつくと考えられる。換言すれば、ベカラムに上接する行為は、話し手・思っている人が話したり、思っている時点では、まだ事実ではない。その点では終止用法の場合と同様である。

また、二重下線で示したように、ベカラムに完了のツ、ヌが上接している例がみられる。ツベシ、ヌベシという、いわゆる確述のツ、ヌが用いられている。ツベシ、ヌベシは、簡略に言えば、ベシ単独の場合よりも、将来の或る一時点で当該の行為が完成する確度が高い。

図式化すると、次のようになる。

他者の行為—(ツ、ヌ) ベカラム—命令、願望

4 おわりに

本稿で扱っているベカラムは、第2節で述べたようにベシもムも各々可能、推量の意味を保っている。したがって、意味からはベシ+ムの合計以上の独自の意味は生じているとはいえない。

それでも、第2節、第3節で触れたような、ベシやム単独ではみられないベカラム独自の構文に支えられた用法の特徴がみられる。終止用法は「疑問詞—自分自身の行為—ベカラム」、連体・準体用法は「他者の行為—(ツ、ヌ) ベカラム—命令、願望」に概ね整理できた。いわば用法の固定化である。それはベシ、ム単独用法にはみられない、ベシとムが結合して生じた、ベカラム独自のものであるが、用法上の独自の特徴は複合辞の指標にはならないのであろうか。強いて言えば、このベカラム独自の特徴は、前掲の松木(1990)における(c)の規定を拡大したものともいえよう。ベカラムは、構成要素

の合計以上の独自の意味は生じていないが、構成要素の合計以上の独自の用法がみられるということである。

繰り返すようだが、複合辞の研究はかなりの蓄積があるが、現代語が中心で、しかも助詞を中心に扱った論が多い。複合辞化を文文化¹¹⁾、形式化の論に発展させる論もある。複合辞化、形式化、文文化は、必ずしも別個の現象ではなく、重なり合っており、捉え方の違いと思われる。古典語の複合助動詞を扱った論¹²⁾もあり、通時的研究もみられるが、現代語のそれと比べると、まだ少ない。そこには前述のような、内省が利かないなどの問題があるが、本稿の方法が、古典語の複合辞についての研究の一助になれば幸いである。

注

- 1) 藤田・山崎 (2006) 吉田 (2022) 松木 (2023) に詳しい。
- 2) 安部・菊池・江口・大浜 (2017) では、竹取物語を資料に、古典語と現代語の複合辞を対照させている。
- 3) 小田 (2015:124) では、「ぬべかりつ」「しなりけり」という承接例から「ぬべし」「なりけり」が複合辞化しているとする。それに対して、小柳 (2020:246) に
複合機能語化は、形態的に固定し、資材の機能語の個々の総和と一致しない意味を表すものを、適例とする。助詞の複合には適例があるが、助動詞同士の複合には適例がない。これは、助動詞の相互承接の仕組みの堅固さによる。
という指摘がある。
- 4) 阪倉篤義 (1966:56) に複合辞ではないが、複合語について次のような指摘がある。
(三宅注—ある形式が一語であるかいなかは)まして、たとへば古代語の場合のやうに、われわれが、その語の現にいきてゐた言語社会の共時意識を、もはや正確には追体験し得なくなつてゐるものについては、その認定は、いよいよもつて困難な道理である。
- 5) 松木 (2023:585) に次のような記述がある
永野の三か条や筆者がかつて提案した複合辞の認定基準・複合辞性の尺度とも関連づけて、整理し直す必要があろう。
- 6) 三宅 (2002) (2022) (2023)。
- 7) 例えば『全訳全訳古語辞典』(小学館)『全訳読解古語辞典』(三省堂)『全訳古語辞典』(旺文社)では立項されているが、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)『古語大辞典』(小学館)『岩波古語辞典』『ベネッセ古語辞典』では立項されていない。
- 8) テキストは『源氏物語大成 校異篇』(中央公論社)。用例後の()内は大本本文の

頁数・行数。表記は適宜改めた。

- 9) このような現象について、此島（1973：286）に、ベカラム、ベシ、ムと同じ推量系のラムを例にとった、次のような記述がみられる。

「わが背子はいづく行くらむ」という例を挙げ、

これら（「なに・など・いかに」等の疑問詞と応ずる「らむ」―三宅注）では表現の焦点はもはや明確に疑問詞にあって、それと「らむ」は呼応し、用言の表わす作用そのものは全く推量の範囲外にある。―「いづく行くらむ」では、どこかを行っていることは事実であり、そのどこであるかを疑っているというふうには

としている。

同じくラムについて、北原（1993：116）では、

既定の事態をもとにするから、その事態を存立させている原因・理由や目的などの推量が可能になるのである。

と記述されている。

- 10) 疑問、勧誘、省略（願望表現が補える）が各1例みられる。疑問、勧誘、省略も、その行為は、話している、思っている時点では未実現である。命令、願望に準じて考えられる。それらを加えると、12例になる。

- ・「おほやげごとの繁さにや、私の志の深からぬにや、さしもとぶらひ物し侍らず。宣はすべからむ事は、何様の事にかは。（行幸892・6）
- ・尼君、思ひやり深き人にて、「あぢきなし。見奉らざらむ事は、いと胸痛かりぬべけれど、終にこの御為によかるべからむ事をこそ思はめ。（薄雲604・10）
- ・「いとよかなり。悩ましきに、牛ながら引き入れつべからむ所を」と宣ふ。（帚木64・3）

- 11) 杉本（2013：88）に次のような指摘がある。

従来の複合助詞を含む複合辞の研究においては、いくつかの観点から研究がなされてきた。それは、第一には、どれだけ複合辞として複合しているかという複合度の問題である。これは、何を複合辞として認めるかという、複合辞研究の根幹に関わるものである。第二には、個々の複合辞の意味、用法を記述するものである。第三には、「文法化」の観点から、元の名詞や動詞の意味がどのように失われ、新しい機能を獲得するのか分析するものである。（傍点三宅）

また、国立国語研究所（2019：82-83）では、

複合辞の研究史は比較的短い、すでに多くの研究がある。その中で明らかになったのは次のようなことである。

- ・形態論的問題：複数の形態素が結合したものである。
- ・統語論的問題：全体として1つの文法機能を果たすものである。

- ・意味論的問題：もとの形態素の構成的な意味ではなく、新たな意味が発生している。
- ・認知言語学の問題：要素の一部が自立語起源であるときには、それらの実質的・語彙的な意味が希薄になり、全体として文法化を起こしている。
(傍点三宅)

と捉えている。

- 12) 例えば柴田 (1994) など。
- 13) 山口 (2002) では、現代語の「はずだ」について、「はず(筈)」(弦をかける弓の部位) + 「だ」(断定の助動詞) から「はず」の意味が変化して、現代語のモダリティ形式が成立したことを述べている。これなどは、「詞」+「辞」の複合辞化といえる。

参考文献

- 安部清哉・菊池そのみ・江口匠・大浜弘樹 (2017) 「平安前期の複合辞・連語機能語 (複合連語機能辞) の現代古典対照—『竹取物語』での形態と用例—」『学習院大学国語国文学会誌』60
- 小田 勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』(和泉書院)
- 小田 勝 (2018) 「古代語における形式用言を用いた複合辞とその用例」『形式語研究の現在』(和泉書院)
- 北原保雄 (1993) 「「らむ」留めの歌における既定と推量—原因などを推量する意味はどこから生じるか—」『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』(三省堂)
- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』(くろしお出版)
- グループ・ジャマシイ (2023) 『日本語文型辞典』改訂版 (くろしお出版)
- 国立国語研究所 (2019) 「コーパスから抽出した複合辞」『コーパスと辞書』『講座日本語コーパス7』(朝倉書店)
- 此島正年 (1973) 『国語助動詞の研究 体系と歴史』(桜楓社)
- 小柳智一 (2020) 「機能語の資材—昇格機能語化と複合機能語化—」『日本語文法史研究5』(ひつじ書房)
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』(角川書店)
- 柴田 敏 (1994) 「ナナリとナメリの<判断>について」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』(三省堂)
- 杉本 武 (2013) 「複合助詞の品詞性について—一名詞を構成要素とする複合助詞を例に—」『形式語研究論集』(和泉書院)
- 田中 寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 田野村忠温 (2002) 「辞と複合辞」『日本語学と言語学』(明治書院)
- 永野 賢 (1953) 「表現文法の問題—複合辞の認定について—」『金田一博士古稀記念 言

- 語・民俗論叢』(三省堂)
- 藤田保幸・山崎 誠(2006)『複合辞研究の現在』(和泉書院)
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2
- 松木正恵(2023)『複合辞研究 その成り立ちと広がり』(ひつじ書房)
- 三宅 清(2002)「古代語の複合辞に関する一考察—「つらむ」と「つらう」—」『学芸国語国文学』34
- 三宅 清(2022)「複合辞ベカメリについて—証拠性の変質—」『國學院雑誌』123-1
- 三宅 清(2023)「連語ケラシについて—万葉集を中心として—」『国語研究』(國學院大學) 86
- 山口堯二(2002)「「はずだ」の成立」『国語と国文学』79-11
- 吉田永弘(2022)「【テーマ解説】複合辞」『日本語文法史研究6』(ひつじ書房)